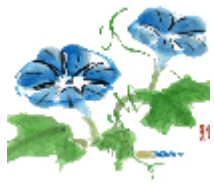
紀南教会瓦版

発行所
紀南キリスト教会
紀南教会瓦版
編集委員会
和歌山県田辺市
下屋敷町８０
TEL/FAX
0739-25-1191

残暑お見舞い申し上げます。
今年も厳しい暑さが続きましたが、そろそろ秋の気配が感じられる頃となってきました。朝は爽やかになってきます。
夏の疲れが出てくる頃ですので、どうぞ、ご自愛下さい。

編集員一同



花によせて

今年も半分過ぎたと思う間もなく雨の季節も明け、太陽照り輝き蝉たちの大コーラスが聞かれる頃になり、時の流れの速さを感じている日々。今でないと出来ない作業を今年も無事やり終えてホッと一息ついている。
それは、これから五、六年先にしか花を咲かせないが、そして何％が願ったような結果になってくれるか全然分からないけれど、一本でも多く無事に発芽し育ちますようにと小さな一粒々の種をよかれと思える新天地に花咲婆さんになって蒔いてゆく。果たして何年も先のそれらの花を見る事が出来るかどうかも分からぬ身なれど、それでも楽しみに希望を持って続けている。
過去に手がけた小さなスミレたちは、年月を経て今では毎年かれんな花を咲かせ、どんどん花のありかを広げていってくれているのは嬉しいこと限りなし。尚、少しは手をかけて世話をしたと自負してもそれらは自然の中で育まれ神様の大きな愛の中で花咲くのだから見る人達の心に、優しく幸せを感じさせる事が出来るのは当然のことでしょう。
話は変わるけれど、最近読んだ本の中に、普段生活している時には考えた事も無いだろうけれど、その生活は何処の誰とも知られぬ人達の多くの犠牲の上に成り立っているのだとのこと。そういわれてみれば、医学を始め他の社会生活に於いても、今までの歴史の中で、色々な出来事があり、その間に多くの名も知れぬ人達の犠牲があって改善されたり、定められたことが沢山あったであろうとの思いを強く持ち、感謝すると同時に、キリスト教徒としては、一番の犠牲は、主イエスの十字架だとの思いで毎週の聖餐に望んでいる次第です。

(み)

マタイによる福音書　六章二八～三〇節

なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。

アガパンサス

ギリシャ語の「アガペー(愛)」から来ているそうです。梅雨の初め頃に静かに涼やかに咲きます。
愛(アガペー)の花です。

コリントの信徒への手紙一・一三：一
ヨハネによる福音書・一五：九
ヨハネの手紙一・四：七

大きな声で言えない話

聖書に、「隠されているもので公にならないものはない」と書いてあるから小さな声で言っても仕方がないのだけど。どうもこれは小さな声でしか言えない。実は、いまだに聖書があまり読めない。
字面では理解できても本当に解っていない気がする。日常忙しいせいもあるが、そういうことのせいであまり読まなくなってしまっている。
毎朝、「今日もともにいて導いてください」とお祈りをして家を出るのだが、導いていただくための御言葉を学ばないのだから、小さい子のおねだりのようなものだ。
しかし神様はこんな私をも周りの環境を働かせて導いて下さっている。
数年前、こんなことがあった。教会の棚から田中牧師の説教テープを借りて聞いていると、「人を癒すのは愛である。説明書の世界ではない。」というくだりがあった。
「説明書の世界ではない」という箇所がすっきりおさまった気がした。が「愛」という言葉がすこしひっかかった。「愛」って何だろう?感じとしては解る気がすえるが。
日頃から、周りに気遣ったりすることの少ない自分には「愛」があるのだろうか、と、ひそかに心配していただけに気になっていた。
そんな折、三浦綾子の特集のようなものがあったので珍しくテレビを見ていた。三浦光世さんが出ていて、子供時代の話をしていたが、その中に北海道開拓部落の牧師さんの話があった。
三浦さんがその牧師さんに「愛って何ですか。」と聞いたそうである。すると牧師さんが(関西なまりで)「お前らはそんなことも知らんのか。愛とは人を大切にしようとする意思や」と答えたそうである。
この話を聞いて、とてもうれしくなった。「愛」が感性的なものなら、そしてもしそれが自分に欠けているならお手上げかもしれないが、意思なら弱いながらも(何度禁煙してもタバコがやめられないほど意志は弱い)自分でも「愛」を持つことが出来るからだ。
そういえば、以前読んだ本(釜ヶ崎と福音　本田哲朗)に、聖書に出てきて「愛」と訳されている「アガペー」というギリシャ語は、直訳すると「大切にする」という意味だと書いてあったと思い出した。
神に甘えたばかりではいけないと思うけれど、神様がいろいろな学びを用意して下さっていることに感謝します。

オープンウィーター

復活の証人

紀南教会牧師
上山　耕司

「もし、神が神であるなら、その神はこの『最後の敵(＝死)』(コリント一五：二六)に打ち勝つ敵であり、死の死でなければならない。」(ローマ書：K・バルト)「死の死」とは死が死ぬこと、つまり永遠の生命、復活の命ということである。
ペンテコステ(聖霊降臨)後、使徒たちがまずなしたことは、イエスに起こった死者の中からの復活、死の死を宣べ伝えることだった。当局からは今後、イエスの名によって話したり、教えたりしてはならない、と命令された。しかし、ペトロとヨハネは「神に従わないであなた方に従うことが、神の前に正しいかどうか、考えて下さい。私達は、見たこと、聞いたことを話さないではいられないのです。」と大胆に言った。(使徒言行録四章)
しかし、イエスの十字架と復活は、この弟子たちにおいてさえも信じられないことだった。彼らはそれまで何度もイエスさまから聞いていたことであったが信じることが出来なかった。また、十字架上のイエスの悲惨な死の現実を見た時、彼らはこの死で一切は終わった、と思った。彼らの希望は無惨にも砕け散り、魂は抜け殻と化し、死人同様になった。
その三日後(実質一日半後)、女達の驚くべき報告がもたらされた。空っぽの墓、イエスはよみがえられたとの天使の言葉、それらを聞いても弟子たちはなおも打ち沈み、身を潜めていた。その彼らの真ん中に復活されたイエスが立たれたのである。そこに居合わせなかったトマスは「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に、又この手を脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない。」と言った。八日後に主はトマスにも現われて言われた「あなたの指をここに当てて、私に手を見なさい。又、あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。・・・見ないで信じる人は幸いである。」と。
間もなくして聖霊が弟子たちに降り、彼らは大胆に死者の復活を語り出した。彼らは地の果てに至るまで復活の証人となった。神が彼らを選らばれた。神が彼らにあらかじめ告げ知らせたからである。「わたしはあらかじめ告げ、そして救いを与え／あなたたちに、ほかに神はないことを知らせた。あなたたちがわたしの証人である、と／主は言われる。」(イザヤ書四三：一二)
私たちはイエスさまの十字架も、復活のお姿も見たわけではないが、聖書の証言と宣べ伝える者の言葉を通して、死に打ち勝たれた真の神を見たのである。打ちひしがれ、失望落胆する者に主イエスが近づいて下さるのである。その時、十字架の光に照らされ、命までも注いで救わんとする神の愛を知り、不思議にも死の死、復活の命に生かされるのである。それは神の恵みの御業というほかない。神が選び、神が告げ、神が救い、聖霊を注いで、ご自身の復活の証人とするのである。あなたたちがわたしの証人である。

あとがき

第２７号のかわら版をお届けしました。創刊７年目も後半戦。全ての営みのその源に神の御手を感じながら皆様の御協力に感謝いたします。
来号は今年最後の２８号、１１月２８日発行予定。